

特54

58

蓮亭圓朝演述

若林珪藏筆記

圓朝
叢談

鹽原多助一代記

速記法研究會

若林
真



東周館

余度人の言語と直寫して其片言隻語と洩さす之を筆紙と登せ讀者として其言語を聴くは感あらしむる速記法と研究せしより講演演説講義等乃に筆記に明せしむる試み頗る好評と得しが世間未だ此速記法の効用至大なるを知る者多かりしを以て此法と擴張して博く世に益せんと欲し曩に東京神田出版の館に應じ著書家の巨擘三遊亭圓朝子が人情話の中に就て最も明なる怪談牡丹燈籠の話を傳へて直寫せるもの十三冊と出版せしむ世人初めて速記法の妙を知りて圓朝子が人情話の寫真なりと賞賛して争ひ購ふに至れり是又於て尙ほ其妙と知らしめんの爲め再び圓朝子と謀り牡丹燈籠又次で高評ある源原多助一代記の談話を演せしめ一層注意を加へて之と筆記し印刷を鮮明にし挿畫と精密よし製裝を美麗として我が速記法研究会より發兌することなれり此書と讀む者皆に我が速記法此効用と覺るのみならず多助が一代の行爲と薄責と以て巨萬の富を得ぬる顛末と玩味せば子弟の教戒商家の鑑鏡となり世を益すると少くもあらざるべし看客此意と諒し我が速記法の効用を圓朝子が作意の信切とと味ひ輕くに讀了すると勿れと云爾

明治十八年一月

若林珪環

實政の爲に
 津野の心
 心は海原



藍河浦

憑漢小平



塩原多助

多助の妻

あづき



搦原多助一代記第二編

三遊亭圓朝演述

若林珪琳 筆記

第二回

殺_二忠_一 僕_二頼_一 夫_二會_一 親_二族_一
失_二愛_一 兒_二旅_一 婦_二逢_一 逢_二知_一 己_二

引續きまゝの搦原多助一代記之多助が八歳の時、のれ話して御坐ります。彼の岸田右内は忠義の爲めと云ひながら、心得違ひも見ず知らずの百姓が五十兩懐中致して居りますを知つて無心と云ひのけます。彼の百姓の驚きまして争ひと成り、右内の百姓の轉びし上へ乗ッ、り。お主の爲め、り換へられぬと嚇して五十金と奪うとす。下では百姓が人殺しと云て居りますが、往來は稀れな山村で名にかふ上野國東口の逢貝村。頃之寛延元年八月の二日、山曇りと云ふので、今まで晴天で居たのが暗くなつて、霧が顔へ掛りまして暗さは暗し。向ふ山で

の盤原角右衛門が山賊を打どめ旅人を助けんど家來と知らず銃砲の
 狙ひと定めてガチリツと引金を引く拍子よ。轟然と響いて無慘や
 右内の乳の上と打抜かれて。一度ひの倒れましたが。一方へ刀劍。一方へ
 草と掴んで立上り。足と爪立て身を保はせ。ウーント云ひながらガク
 と血を吐き出します。其血が百姓の顔へ掛ります。百姓は自分が
 打れた心地がして人殺しくくと保へながら云つて居る所へ盤原
 角右衛門が獨木橋と渡ってトツトツと驅けて來ました。盤コレ御
 旅人。お怪我はありませぬ。角ハイ怪我アまたのもしん祿エ。眞赤十血
 が出やした。盤それの私が今上の賊打留めたに依て其血が貴君に掛
 つたのだらう。夫れとも少しの切られました。角ハ一道理で痛くも
 何んともなかりた。助かりたか。難有御坐へやす。と血塗又成た百姓が
 仰向て見ます。と。鴨鹿乃瀆無し。山猫の皮と前掛しました。八千草の
 笠を背負ひ。八百目の銃砲と提げて。盤アれ怪我が無くって宜つたな

ア角獵夫さんで御坐へやす。既に此奴も殺される所と助かりやした。
 私の懐中お金のあるのを知て。跡を尾て來て取らうとするから名主へ
 連れて往くべろと思つて居た所の既お殺される所でがんした。盤イヤ悪い
 奴で御坐います。云ひながら賊と見ると右内だから喫驚して。盤右内
 ヤア。心得違ひとした。右内ヤア。と呼ぶ聲が忠義此心に通じ
 ました。右内は漸々細き目と開て見れば。目の前主人乃顔。右旦那様
 へ。と云ひあがら盤原の手と廻り附く。何故心得違ひとした。汝も元
 と侍士でないか。如何に落ぶれ果て食ふや食はずの身と成るともナ
 ア。何故其様な卑劣量見に成てくれた。濁しても盗泉の水と飲ます位
 の事は心得て居るでない。何いふ譯で人の物と奪る氣に成た。手前ど
 は知らず。此角右衛門が旅人と助けやうとして打留めたのであるぞ。
 コレ許してくれ。といふ。右内ハ。ハツと息を吐てものが云
 ひ度か外へ出る息をかりて。漸く微な聲と出しまして。右旦那様。八年ぶ

りて主公にお目に掛りました所彼の通り見る影もないか身の上。御新造様からも五十金才覺あて呉ると家來此私へ手をついてのか頼も。此の旅人が金と所持して居りますのを見て。主公と世と御出し申度ばつゝありて心得違ひと致しました。主公のれ手お掛て死ぬのハ本望で御坐います。永らく御奉公を致して御恩と戴いた御主人の妹と連れ出して逃けるやうお心得違ひと致しました右内ゆえ天罰主罰報ひ來たつて只今此所で旦那様のれ手お掛て死ぬのはあたりまへて御坐います。江戸表に殘る女房おがめと未だ年のいかな娘が此事を聞きましたら無欺させうが決して盜賊として殺さるたのでいな。旦那様と江戸表へお連れ申度と思ふ心得で斯様と事と致しましたと云ふ事と旦那様から仰聞られて下されませ。最う目が見るん此世のお別れ。云ひながらハタリを倒れましたから鹽原も思はず聲がしまして。鹽原、不便な事をぞた。家内が聞たら無欺くであらう。許して呉れを欺くのと

百姓が聞て居て。ホロロくと泣き出しました。角とんだ事もありました。ア、金と貸せば宜うけた。道理で主人の爲め金が入るだ主人も私も印形と捺て證文も張るのらつて。名前まで明かしたか。よもや虚言だと思ふのら貸さなうったツケ。搦ハイ全く私共の家來で御坐ひまして手前と世に出し度ばありて此の様な事と致しました何卒御勘辨と願ひます。角御勘辨所じや孫へ銃砲と打たなけりやア乃公が殺される所た。何んとそう云ふ長家來と銃砲と打たら無慈悲のんべえ。搦貴君も不便と思召ならば此遺體の拙者一人で持まゐる事は出来せんが。此處又細索が在ります。おそれこれに括げて吊りまして銃砲のさし荷ひて。一方搦ひて呉れせんか。角ハア搦ぎます。と泣く。搦いで小川手前まで歸て來ました。家でお清ハ角右衛門の歸り々遅ひのら案じて居ります所へ。鹽今歸つたヨ。清お親父様のれ歸りだよ。オヤ。長家か一人でいけないうらお手傳ひが入りましたか。猪でも打ちましたか。

搦「イヤ飛んだ物を打ちままた。お前か聞たら無驚くだらう。話しとする
 からマア貴君此方へお上りと。百姓と上へわけ。これくの譯だと話し
 として搦おせい間違ひといひ云ひながら今朝別れた右内と銃砲で打う
 といひ思ひなつた清何處に居りますと云ふら簀笠を反除けまける
 と。情けない死状清ア、今朝お前も別れる時。金さへあれば旦那様が元
 の武士よなられると無理な事と頼んたから私共兩人と世も出し度ば
 かりで。非業な死とさせたのも妾が酷く頼んたから心得違ひとしたの
 だらう。良人何して人と獸と見違へままも搦イヤ、二獸と間違へて打た
 のではありませぬ。此の方よ係た山賊を心得て打たのだ。泣く所じやな
 い。お詫ひ言を申せ清「ハイ、悲しいのに取紛れ御挨拶も申ませぬ。こ
 れの家來とい申あがら私共の妹と女房として居りまはから家來と申
 ても弟と同じ事跡には七歳ある子も有りまして不便なもので御坐
 いまは何卒忠義も思召まして御勘辨なされて下さいまし角「私も

斯いふ事になるんなら話し合ひにしたものと。打擲るべると思つたら
 此様な事よ成て仕舞て誠又氣の毒だ多れ親父様おんで叔父さんと銃
 砲で打たかあア。江戸に居る叔母さんだの。おゑいと云ふ従弟が聞たら
 こんな又怨むの知れ給へら。若し叔母様が來たら多助が間違ひで打
 たと云ふから家意の殺さ給へふりをけるか宜ヨ搦ア、宜い。小兒
 又まで苦勞と掛けて濟まあい角「誠又年はいかねへが。へエ八歳位なも
 んで。へ子實のある木は花から違ふつて。貴君御侍士で御せへやすナ搦
 「取紛れまして未だ名前も申上ません。手前は鹽原角右衛門と申す。浜
 士で角イヤサ私が鹽原角右衛門を云ふ百姓サ搦「イヤ私ハ角貴君何時
 から鹽原角右衛門と云ひやす搦「何時からと云て先祖から角乃公が名
 前も先祖のら搦「手前の先祖は下野の國搦谷郡搦原村の郷士搦原角衛
 門と云ふ事か書類も残つて居りますすが精しくも調べて見ませぬ角
 「私が先祖も野州搦谷郡搦原村で沼田へ來て鐵一ツから今でハ田地や

山も持て居りやすが。それじやア貴君も元と洗へを同じ血統で鹽原の縁です。角縁の縁だが此様お事に成ては惡縁だ。縁へ。ア此所に金が五十兩あるらこれ身形を整へて立派お侍士に成て下せへ。鹽何う致しまして見す知らずの貴君よ頂戴する事と出来ません。角、ツテ元を洗へば同じ血統じやないか。鹽左様で御坐いますが大金を戴く譯はありませぬ。角、戴か縁へッて云ふが貴君の鉄砲を打たなければ己ア命を取られて金も取られてしまふのだ。それと助つたのだから貰つて下せへ。貴君此金で江戸へ歸ら縁へせ此の右内どのが犬死にありやす。命と捨てても主人と助けてへと云ふのだら此事が世間へ知らせへしなけりやアいゝ乃だ。賣て早く御屋敷へ歸て下せへ。鹽、イエ、く家來が悪い事と致去たのだから手討ちもして宜しいので角、それでは五十兩で貴君の大事お物を買て往きやすべ。鹽、ハイ左様でせうが四年前の山水で大事なもの昔流されて仕舞て何もありません。角、より

やア貴君の悴でせう。これを私よ下さい。鹽、何う致しましてこれ一人の悴です。のらいけません。角、お前方を年が若へあら未だいくらは子が出来る。ヨ、已ア四十二歳よなるが未よ子が縁へうら此様子と貰て往け。心まんな難有事は縁へ清、これはどう致して上られませぬ。角、鹽原の子と鹽原が貰ふのだら宜じやあいか。鹽、上げられませぬ。清、どんな事と仰しやいます。家來に無心と申たのも此悴と世お出したいのらで御坐います。どう致しまして出来ません。角、よく考へて御覽おせへ。貴君が江戸へ往て此家來を此地へ埋めて。江戸から此數坂峠と越して追善供養としよ来る事は出来やアしねへ。私が此子と貰て往け。私の沼田の下新田。此所までは半日で來られるから、墓參致させて追善供養もしようじやあいか。私の三百石も田地があり山もあり不自由いさせ縁へから。殊に此子の爲めには叔父さん又當ると云ふだのら子の縁へ昔日と歸めて下せへ。鹽、成程面白い事を云ふ信切な方だ。宜しい上げませう。清

塩原の英
雄よく
馬を駐む

塩原妻かき

塩原右門

百姓右門

源氏物語

六

徳巴法并記



「何を仰います。多助と違て良人どうあさいますへ。宜しい點止て居る。コレく多助此處へ来い。と云ふと多助ハハイと云つて。愛らし紅葉のやうな手について其處へ坐れる。盤コレく手前ハ私の眞實の子でない。此沼田のお百姓の子だが乳がないので。養の上から預つて養育て呉れどの御頼みもある。八歳まで育てたから。最下新田とやらへ歸つて。角右衛門様御兩親も孝行と蓋せ。而して此の死んだ叔父さんの遺養供養としろ。よいか解つた。其か前と育てた禮として五十兩と下すつた。此金子で私が身形と整へて江戸の屋敷へ歸るから。ようく解た。多「アイ毎時でも母上さんが私と抱て寝て居て。嚴父さんが金があれば江戸の御屋敷へ歸へれると云ふから。ア、金が欲しいと思つても仕様が絲へあら。豚兒が今も成長なれば稼いで上げべえと思つて居たいが。それじやアいやだけれど。此の下新田の叔父さんの子の積りで往やすべえ。角ア、何んでも知てる。らいいけ絲へ。どうか聞きわけて呉れ。盤「能く

聞きわけて呉れた。清「お前お母さんが毎晩愚痴を云たの。能く聞きわけて呉れた。お前も悪戯や何をする。と不孝になります。妻共ハさいものとお思。角「難有。それではお壯健で。又此地の田舎の親父さんの方へも来て逢ふ事かありやすべえ。盤「イヤ屋敷奉公とする。便か出来ん。殊にお前の爲めならんから。コリヤ多助此の親ハ假の親と心得て沼田の尊父さん孝行としろ。多「ハイ。孝行をしますから早くて屋敷へ御歸り成さいますと云ひれてお清は堪えかねて泣きながら清「寝ますと踏脱きまそから氣と注けて下さるやうに。どうの御目よりませぬが御家内様に宜しく御面倒と願ひませ。角「ア又心配するよ。及ひやせん。これから祝ひ酒肴で親類固めよ。佛の通夜と酒宴をして翌日三日の朝。村の倉田平四郎といふ名主へ届けとまて。百姓角右衛門が多助と十文字お脊負まして夫婦と須賀川まで送て来まして夫婦の「どうか道をお願ひなすつて。角へ。道の氣と注けるから大丈夫でん

す。どうか屋敷へ歸て御奉公とさされたら便と聞せて下さい。御無音勝で御坐いますから何分願ひます。多父上さん。母上さん。壯健で屋敷へれ歸んなせへ。と後ろ身は成て此方と伸び上て見る。豊原夫婦も見送りく泣く泣く歸り掛ります。向ふからウイウイといふ聲で大勢驅けて来る。其先へ真しくらに驅けて来たの青馬で、荒れ荒れてトッくと来ます。此道は左右が谷川で一騎打で何處へ往く事も出来ません。ア、此子よ怪我をさせてと濟まさいと。氣もんで居ると見る。り浪人豊原角右衛門が馬の前へ仁王立に成つて馬の轡と押へて百姓は渡す。幸ひ此馬の角右衛門が買はうと云た馬だから直ぐ馬と受取て。多助と馬に乗せて沼田の下新田へ参ります。浪人豊原の角右衛門のら恵まれた金で支度を整へ名主の所へ別れと告げ参ります。名主も名残りが惜いから立ち祝ひとしたいと云ふので。村で豊原と剣術を教へて貰た者も参ります。九月の三日まで留められました。こ

れの豊原多助の生育で御坐います。扱れ説話替て江戸表に居ります。お龜は娘れゑいが毎日御親父様は未だ歸りませんかと云はれるので。おか先も案じて居ります。と。堺屋傳吉が歸つて来まて。字之助さんは上州の小川村で知人よ逢て別れて。私は沼田の大竹屋よ待て居たが来ないので。何時までも馬鹿りく。と待ても居らなぬ。おら歸つて来たが。未だ字之助さんの歸らない。と云れたので。種々心配して。神籤と取り。賣卜者に見て貰ひ。杯した。が分らない。殊も借財方おら責められて。逆も身代が持切れませぬ。おら身代と仕舞まして。七歳なるおゑいと十文字に脊負まして。心當りと尋ねやうと出立しました。は九月の三日。唯上州小川村と聞た。心かりで女の獨り旅で御坐ります。から馬士や雲助杯の人の悪い奴よ挑めはれ。心細くも漸々の事で中仙道の。大宮宿泊り。翌四日の。鴻巣の。田本が中食です。例の旅費が乏しい。おら勿論。驚籠なんぞと雇ふ事は出来ず。馬と雇ふ位ですが。夫れも十分に往きませぬ。漸

々田本で中食と詠へて居ると。側へ居る客の年齢四十一二なる女で。衣裳の小辨慶の衣物に細い縞の半纏と着て居る。商人体のお神さん。今一人は息子か供か。年齢を廿一二なる商人体の人品のいゝ男で縞の脚半甲掛も旅馴れた様子で。頻り中食として居りまはと。男母上さん。いゝお子で御坐います。孫へ女ア、いゝお子だ孫へ。モシエお神さん。貴婦のお娘子で御坐います。孫ハ、左様で御坐います。女幾歳になります。貴婦ハ、七歳で御坐います。女貴婦の何處へお出で。孫妻は上州小川村まで参ります。小川村といふと何處へお出で。孫妻は上州小川村まで参ります。男小川村と云ふのは上州も東口とやら。山國と聞きたが大層遠方へお出で。こざいます。孫へ女お前さんは江戸餅のやうですが。何乃御用で小川村へお出で。孫ハ、い妻の匹偶が小川村に居まして。夫へ参りますが。誠お旅馴れせんから困ります。女左様ですか。私共は前橋も居ますが。元は中橋で生まして江戸生で御坐います。前橋

でさへ寂くつていけません。そんな山の中へお出で成のはお一人で。嗚マア御心細いのでせう。娘さん此處へお出で。人見知りしない子です。から。叔母さん。顔と横よして云ふ。女ア、此れ着をお唄り。唄われないけな。何人様の所へでも構はずあがつて困ります。女妻の子煩悩ですが。子と云ふのは此忤計で。女の子はもう可愛らしく。之とれ唄と彼是云ふ内に。直又馴染まして。取附たり。引附たりする。どうせ熊谷へ泊る積で。松坂屋と云ふの宜う御坐います。其家へ泊りませう。貴婦の草臥でせう。から妻が背負って上げませう。と云ふので。唄も一人旅で連れが出来た。心嬉しく思て居ります。最う悉皆そのお神さん。馴染んで。お神さんと一所。寝なければ。聞かない。今夜は妻が抱て寝ます。と云ふので。神さんが抱て寝て翌日出立しました。前より熊谷より前橋へ出ます。又は本庄宿の手前。御堂坂と申所より。檜木戸村から。八丁川岸。それより。五料と申所に日光一の關所が御坐い

ま。當今馬車道と成りましたが其頃は女は手形がなければ通られぬ
 とて。久下村より中瀬又出て。渡しと越て。漸々堺と云いふ所まで來ます
 ど。七つ下りになりましたして。足が勞れて歩行かれませぬ。女何うしやう伊
 勢崎まで往やうの御母上さん此邊にいい宿屋がないから伊勢崎
 の錢屋へ泊りませう女さうしやう而してね神さんも勞れて居るから
 駕籠をアレサどうせ私共が乗るんですから宜しう御坐いますと云て
 居る中男が暫く經て馬と一疋駕籠と一挺頼んで來ました男母上さ
 ん駕籠と一挺はかありませぬのらお神さんの馬に乗り附けませぬ
 のらね神さんと駕籠又乗せて。母上さんは馬でね出なさい女それとや
 アさうしやう。お前はお母さんとお駕籠へお乗りヨ子イ、エ私しや叔
 母さんど一所でなくツちやいや龜あれまア聞きわけのない事をか
 女それで仕方がないから少しの間氣味が悪くも乗つて御覽なさい
 な。馬には乗つて見る。人にと添て見ごと云ふことがありませぬから龜ハ

イく乗つて見ませう。どこわく乗りますと乗り付けませぬでこと
 又道中馬の危ないから油汗が出て確りつらまつて居る。ヤン
 くを馬方が曳き出さおれから百々村へ出まして。與久村から保泉村
 へ掛ますと。駕籠より馬の方が余程後れましたから。心は焦けど馬と緩
 く。跡より來る男と遅く。姿の見へませぬ。其うち雜木山がありまして左
 右から生茂りて薄暗い所へ往きませぬ馬士が立留つて馬貴婦此處か
 ら下りて下さい龜此處のら下りちやアしやうがないヨ。伊勢崎の錢屋
 まで往くのじやないか馬私と與久村の者だのら駄賃より出越して來
 たんだのら。此所で下りて下せへ龜妾の始めて困るのら跡のら兄さ
 んの來るまで待てね呉んあさい馬いけねへから下りてね呉んなせい。
 と云ひながら無理よお龜の腰と押へて引きすり下しては舞ひました。
 お龜の道中馴れないのら龜何とするんだと云ても仕様がない。其中馬
 方ハヤンく馬と曳て往て仕舞ひましたから龜誠又道中の馬士



百姓角右門

右内妻かろ



角右門かろの危急を救ふ

と云ふものゝ悪いものだ。ア、彼の兄さんはどうしたらうと胸々して居ると。雑木山から草と踏んで来た悪漢が物とも云えず搦まへるうら。アレーと云ふ中お一人が足を縛へ。一人の手を縛へ。搦いで行きます所へ通り掛りましたの。沼田下新田の角右衛門で。木崎から歸り道。暗さは暗し分らないのら。悪漢又突き當ると。お光を搦いださり倒れました。角右衛門の見ると女と搦いで居るのら。此奴は盗賊だなど。突然事骨で打ますぞ。百姓で力があるのら。痛いの疼くないの。悪漢の搦いて逃げ出しました。角お神さん。怪我はありませんか。龜ハハハ。誠又難有御坐います。女一人で御さいますのら。どうも苛い目又逢ふ所で。お蔭様で助りました。角私も錢屋へ往くんだから一所に往う。お前さんね一人かへ。龜「先へ娘が参つて居ます。角何しろ一所に往きなさん。とこれから伊勢崎へ来て。錢屋へ往くぞ。左様お娘さんを連れて来なれ客のありませんぞ。」

云ふから万一宿屋の名前でも違ひはしないの。外の宿屋を捜しても知れないから。角右衛門ハコリヤア此のお神さんの思漢の爲め。娘を畧取されのしな。いと思しゆる。角お神さん娘さん。の標致ハ生々。フウン親だのら能く見へるだらうが。七歳とはいひあがら畧取と云ふものがあるのら。見ず知らずの子と可愛がるの。了簡が在て畧取したのでとねへると思つて。龜ハハ。妾の良人が歸ません。のら尋て参りますので御坐ますが。假令夫に廻り逢ひましても一人の娘を畧取されまして。いどうも良人に濟ません。何處の御方か。存ませんが。娘と取返す事。出来ませぬまいか。角取戻す事も何も出来ぬ。お前さん。何處の者だい。龜妾ハ江戸の本郷春木町に居ります。旅商人の岸田宇之助と申すの。女房で御坐います。角エ、それヒヤ。お前は遠原角右衛門と云ふか。士の妹で。其家來の岸田右内さんのお神さんで。お前さんと云ふん。はるへ龜どうして御存じです。お前さん。どうして。最う魂消た。實又不思議。

議な縁サ併シア、氣の毒事だが貴婦の尊兄角右衛門様と云ふ人の
小川村に浪人して居るだが。云ひきて驚き「貴君どうしてそれと御
存じて御坐います 角兄さんふも御亭主も私が逢せやせうが未だ兄
さんの支度も出来ぬへら逢はして上げやねば。心配し拵へがやう
がんです。云ひましたけれど沼田の角右衛門の。夫れでい良人が非業
に死な事も知らず。子供と連れて来る道で娘を奪取されるとい氣の毒
事と。かかめを不便に思ひまきて。これら娘と奪取された事と其地
の名主より八州様へ願て手配して貰ひ。かかめの計らう下新田の
角右衛門の世話になりますと云ふお話し。一回も申上ませう

豊原多助一代記第二編 終

明治十七年十二月十一日版權死許可目 日出版
東京府下谷 町一丁目六十一番地
速記法研究会

筆記者 若林 茂 裁

東京下谷神楽町一丁目
六十三番地住

社告

○本會の三遊亭圓朝子の説話中最も勸懲に裨益あるものを速記一圓朝叢談として
陸續出版すへー○本書の拾八篇を以て結局とす○本書の一席の説話を一篇の編纂
して刊行せる故其説話の長短により自らの紙数を増減あるべし○本書の定價は壹
篇金九錢五厘全拾八篇の前金壹圓五拾錢とす本書の各繪雙紙店ふあり
○はやがきとりの まるへ

右の本會々員林茂淳氏が速記法研究の餘暇にかゝる文字を以て記述せしものふく
「かきくここい」ふて出版せし「かきのまるべ」の三と五と一載す ○速記法に關す
る事項の載せて漏すことなければ速記法の妙用如何を知らむとせらる諸君に郵税共
金拾貳錢を日本橋區本町三丁目みづぼやへ送らるれば誤謬より直ち郵送すべし

